氷の伯爵と桜色の風

柊かえで

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
氷の伯爵と桜色の風

【Ｎコード】
Ｎ２０４９Ｈ

【作者名】
柊かえで

【あらすじ】
アンナとジェレミーの出会い。幼い二人が出会う時どんな物語が紡ぎだされるのか

プロローグ

その日は、朝から雨が降っていた。黒い服を着た人々の列が、次々と教会へと吸い込まれていくのをじっと見つめる少年。
湿気でまとまりのなくなった美しいブロンドヘアーを、気にもしない様子で、ただそこに立ちすくんでいる。
印象的なブルーグレイの瞳に、いっぱいの涙を浮かべながらも、零すものかと唇をかみ締めている様子は、周りから見ても痛々しいほどだった。
「ジェリー、泣いてもいいのよ？」
年配の女性が、自分のバックからハンカチを取り出し、彼へ手渡したが反応はない。
そんな様子がまた涙を誘ったのか、辺りからは鼻をすすり上げる音が聞こえ始める。
「あれは……じゃない……」
彼が呟いた言葉は、誰の耳にも届かなかった。

ーあれは母さまなんかじゃない……
ポツリと呟き、人の間をかき分け、教会の裏庭へと歩き出す。
１０歳の誕生日を、ついこの間迎えたばかりの少年、ジェレミーには、最愛の者との別れを受け入れろというほうが、無理な話なのかもしれない。
しばらく歩き、教会裏の大きな木の根元に座り込むと、また堪えていたものが溢れ出しそうになり、慌てて手の甲で拭う。
「だれっ！？」
背後に気配を感じて声をかけると、茂みの中から彼より少し幼い印象の少女が姿を現した。
「びっくりさせちゃった？」
悪びれる様子も無く、笑顔で答える少女。

「私は、アンナ。あなたは？」
そう問いかけられ、答える事が出来ずにいるジェレミーの隣に、アンナは、なんの断りも無く腰掛ける。
「！？　な、なに？」
　生まれながらに、貴族のジェレミーにとって、少女アンナの行動は、驚くべきものだった。
まだ子供ながらも、立派な紳士になるべく教育を受けてきている彼には、
初対面の相手の隣、しかも、地べたに直接座り込む、などという行動に出る女の子は、理解し難いものだったのだ。
「どうして？　このほうが話しやすいでしょ？」
そんな彼の心情を、知ってか知らずか、彼女は気が抜けるほどの警戒心の無さで、相変わらず屈託の無い笑顔を向けている。
「なんか、君を見ていると、警戒した自分が、バカみたいに思えてくるよ……」
アンナの様子に、ジェレミーは脱力して、木の幹に寄りかかる。
先ほどまで降り続いていた雨が上がり、空には太陽が顔を覗かせ始めていた。
木漏れ日が、アンナの頭上に降り注ぐと、ジェレミーが何かに気がつき、表情を変える。
「君、その髪の色……」
そう言うと、アンナは少し曖昧な表情になって言った。
「珍しい色でしょ？　赤毛でも栗色でもない半端な色。私は好きじゃないんだ。友達には、鉄さび色だーなんて言われるし、あなたみたいにキレイなブロンドがうらやましいな」
日に当たり、キラキラと輝いて見えるジェレミーのブロンドを、眩しそうに見つめながら、
比較するように自分の髪を、指先に絡ませている。
「そんな事無いよ！　君のその髪の色。確かにあまり見ない色だけど、とても綺麗な色だと思う。僕の母さまが、同じ色をしていたん

だ」
また、母の事を思い出したのか、ジェレミーは俯いてしまう。
「もう、触れることも出来なくなってしまったけれど……」
アンナが、真っ白なハンカチを差し出している。
「泣かないで。私には、母さまも父さまもいないからわかんないけど、きっと、とても悲しい事なのね」
そう言って、アンナも目を赤くする。
「泣いてなんか無いよ！　そう言う君のほうが、必要みたいだよ？」
逆にハンカチを取り出しながら、アンナに差し出し、ジェレミーは不思議な気持ちになっていた。
彼は、母を亡くしたばかりなのに、アンナと話しをしていると、その辛さも幾分和らいでいくからだ。
　彼女の髪の色が、彼の母と同じ色をしているからなのか、それとも彼女の雰囲気に流されたからなのか。
「ありがと……」
ジェレミーから差しだされたハンカチを、素直に受け取り目元を押さえるアンナ。
「君は、父さまも、母さまもいないって言ったけど、どこからきたの？」
そんな問いかけに、黙って彼女が指を差す。
その先にあるのは、教会に併設されている孤児院で、ジェレミーの母、レディ・ローレンが寄付をしていた場所でもあった。
「そう……」
なぜか、ジェレミーは自分の身分を、アンナに話す事は出来なかった。
同情心からともとれるが、ただ普通の友達でいたかったからだろう。
大概、彼が名前を口にすると、恐縮して友達になれないか、逆に利用しようとして近づいてくるか、のどちらかなのだ。
　二人の間に、短い沈黙が流れる。

しばらくすると、孤児院のほうが騒がしくなっているのに気がつく。
「いっけない！　シスターが、気がついちゃったみたい」
そう言い、慌てて立ち上がるところを見ると、どうやら黙って抜け出してきたようだ。
「私、もう行かなきゃ。そうだ、あなたの名前、聞いてなかった」
アンナは立ち去ろうとして、腰を上げながら尋ねる。
「僕？　……ジェレミー」
自分の身分を明かしたくないジェレミーは、ファーストネームだけを口にした。
「そう、ならジェリーね。またね！」
彼の言葉を疑う様子もなく、晴れわたる青空のような笑顔を残し、風のように去ってしまう少女。

最愛の母を無くした日、彼は、不思議な少女に出会った。
今まで会った、どんな女の子とも違って、破天荒で驚かされたけれど、明るく優しい少女だった。
人生で、最悪な一日になるはずだった今日と言う日が、それだけではない、何か特別な日になったような気がしていた。
　そして彼女も、まるで聖書に出てくる天使のように美しい少年との出会いに、まるでいつか聞いた、夢物語の中に迷い込んだような、不思議な感覚に囚われていたのだった。

春の訪れ

「ほらみんな！　もう起きて学校に行く時間よ！」
手に持ったフライパンを振り回しながらアンナは各部屋に声をかけてまわる。
「そんなに騒がなくても聞こえてるよぉ……」
「う、うるさーいっ！」
「なんだ、火事でも起きたような勢いだな」
４歳から１６歳までの子供達が、不満をもらしながらゾロゾロと食堂に向かう。
最年長のアンナは、ここにいる子供達の世話係を任されている。
「アンナ。院長先生が話したい事があるからって、呼んでらしたわ。」
慌しく朝食の支度をしていたアンナは、シスターにそう声をかけられた。
「院長先生が？　そう、わかりました」
どうしたのだろう？と思いながらも、一通りの準備を終わらせ院長室へと向かった。

「失礼します」
声をかけて中に入ると、いつも優しい笑顔の院長先生が、少し困ったような顔をしてソファに座っている。
座るように促されて、戸惑いながらも腰を下ろし用件を聞こうと待つが、院長先生は黙ったままだ。
「あの……院長先生？」
「アンナ、急に呼び出してしまってごめんなさいね」
アンナの不思議そうな視線に気がつき、少し慌てた様子で口を開く。
「実はね、あなたのご両親が見つかったの。」
「……え？　それって、どういうことですか？」

アンナは自分に告げられた事が、理解出来ずにいた。
それもそのはずで、彼女は物心ついた時から、ここハーヴェイ孤児院で、両親はおろか身内も誰もいない天涯孤独の身として、育ったのだ。
「先日、あるご夫妻から手紙が届きました。そこには、１４年前に誘拐されて行方知れずになってしまった娘がいる。と……」
「待って下さいっ！」
院長先生の言葉を、途中で遮るアンナ。
「それだけで、私が娘かどうかなんてわからないじゃない！」
急に告げられた事実に、混乱して、取り乱している。
「アンナ。手紙には当時の状況や、捜査資料も添えられていました。私達はなんの根拠もなく、あなたを手放そうとしているわけではないのよ？」
優しくなだめられるように言われると、今までハーヴェイで過ごした日々が思い出される。
　シスターや院長先生は、院の子供達を、本当の家族のように温かく接してくれていた。
窓の外からは、ジュニアスクールの子供達が学校へと向かう声が聞こえてきた。
「ごめんなさい……突然の事で、私……」
そんなアンナの様子に、微笑みで答えてくれる院長先生。
「いいのよ。突然の事で驚くのも無理は無いわ。あなたのご両親、カンター男爵夫妻も、あなたに時間をあげてほしいとおっしゃって下さっているから、少し考えてみるといいわね」
カンターダンシャクフサイ――男爵夫妻！！
「だ、男爵夫妻って？！　私の父さまと母さまが、男爵夫妻だって事なの？！」
アンナは、次から次へと明かされる事実に、軽く眩暈をおぼえた。
　数日が経ったが、戸惑いが消える事はなく、結局なにも変わらな

いまま、カンター男爵夫妻との対面の日を迎える事となった。
男爵夫妻は、昼過ぎには到着予定と聞いていたが、アンナは朝から落ち着かない様子で、部屋の中をウロウロと歩き回っている。
「あ～っ！　もう、私らしくない！　もう考えるのはやめた！」
ベットに身体を投げ出す。
　うん、そうよ。
　私って、あり得ないくらい強運って事よね。
そう開き直る事にした。
元々、アンナは物事を深く考えない性格だ。
ドアを叩く音にベットから降りると、シスターが顔を覗かせる。
「男爵様がお見えになったわよ。支度はできたの？」
「出来てるわ。って言っても、荷物なんてほとんどないんだけどね」
　アンナの足元には、小さなカバンが一つ。
手鏡とクシ、最低限の着替えと寝巻き、それとシスターが読み書きの勉強にと、１２歳の誕生日にくれた本が一冊。
あとは、お守り代わりの白いハンカチが一枚。
それが彼女の全財産だった。
後のものは、少しでも役に立てばという思いと、自分の事を忘れないでいてほしいという願いを込めて、幼い子供達に残していく事にした。
「シスター、私もう行くね」
「元気でね……」
少し寂しそうな笑顔でそう言った彼女の表情に、もうここには戻ってこられないんだと思うと、熱いものが込み上げてきそうになる。
後ろ髪を惹かれる思いで背を向ける。
振り返ってしまえば、「私はずっとここにいたい！」とすがり付き、泣いてしまいそうだった。
　あちらこちらに、思い出の欠片を見つける事が出来る。
ドアについた小さな傷や、いつもみんなを怒鳴りながら駆けずり回った廊下。

目に焼き付けるように、ゆっくりと歩を進める。
私も小さい頃は、良く孤児院を抜け出して、シスターや院長先生を困らせたっけ……
ふと、立ち止まって窓の外を見ると、天使のような男の子と出会った幼き日の思い出が蘇った。
あの大きな木が、見守るように立っているのが見えたのだ。
あの子は今、どこで何をしてるのかな……
そっとカバンの上から、あのハンカチに手を当て、前を向き歩き出す。
院長室の扉の前で、一度深呼吸をしてから、思い切ってノックする。
「アンナです」
「どうぞ、お入りなさい」
静かに扉を開けると、院長先生の前には仕立てのいい服に身を包んだ紳士と淑女が座っていた。
すごく綺麗で、素敵なドレス！
あれってきっと、高いんだよね？きっと……
さすが、貴族の方は着ているものにも気を使ってるのね。
思わず今の状況とは、ずれている事を考えてしまう。
「アンナ？どうかしましたか？」
そう言われて我に返り、慌てて会釈をする。
いけないっ。そんな事を考えている場合じゃなかったわね。
反省すると、改めてカンター男爵夫妻に意識を向けると、どこか自分に似た感じのする夫人に気が付いた。
「アンナ……あなたなのね？」
夫人は、そう言うと同時にアンナに駆け寄り、手を握りしめてきた。
近くで見ると、ますますアンナと良く似た顔立ちをしている。
「お……かあ、さま……？」
そんな夫人に、思わず口から言葉がこぼれる。
あ……いきなりお母様はまずかったかしら……

自分で言ってしまった言葉に少々後悔しながら婦人のほうに視線を向けると
彼女は喜びのあまり目にいっぱいの涙を浮かべていた。
「まだ、無理にそう呼ばなくてもいいのよ？」
１４年という歳月が、そう簡単に埋まるものではないと理解しているのだろう。
夫人の優しい気遣いに、アンナの心の中に温かいものが流れ込んでくる。
正直、両親と言われても実感がないのは事実だけど、この人達が本当に自分を望んでくれている事は伝わってきた。
アンナは、それだけで十分すぎるほどに幸せな気分になった。
　これが、家族の温もりなのね。
　すごく優しそうな母さまと父さまでよかった。
優しい男爵夫妻に会って、アンナは今までの不安がゆっくりと和らいでいく事を感じていた。
「ああ、神様感謝します。再び生きて巡り合うことが出来るなんて……」
夫人は、それ以上は声にならない様子で、アンナを愛しそうに見つめている。
「アンナ、良く無事でいてくれたね」
カンター男爵も、そっとアンナの肩に手を置き、感慨深い様子で見つめていた。
　アンナの中で、長い冬が終わり、雪解けの春が訪れたのだった。

新天地

迎えの馬車に揺られ、男爵邸に向かう道中は、アンナにとって驚きの連続だった。
まず、馬車の絢爛豪華なことといったら！
アンナが知る、どの言葉でも形容できないほどだった。
　世の中にはこんな世界もあったのね……
自分がその世界に、足を踏み入れた実感はまったくない。
途中、カンター男爵夫人が「あれは……なのよ」とか「あちらに行くと……伯爵邸なのよ」
など、色々と説明をしてくれて、アンナは笑顔でそれに答えるが、実は半分も理解できずにいるのは言うまでもない。
　私、これからちゃんとやっていけるのかな……？
　きっと、なんとかなる！　うんそうよ。
アンナは持ち前の明るさと、前向きな思考でそう思っていた。
「そうそう、アンナ。あなたに伝えなくてはいけない事があるの」
突然夫人が、思い出したようにそう言う。
「実はね、記憶に無いと思うけれど、あなたには一つ違いの妹がいるのよ」
予想外の言葉に驚きを隠せないでいるアンナに、夫人はこう付け加えた。
「大丈夫よ。あなたに会える日を心待ちにしていたから、とっても喜ぶわ」
「妹っ！？　私に妹がいるの？　きゃー！　嬉しいっ！　ずっと妹が欲しかったのー！！」
「アンナ、喜んでくれて嬉しいわ。でも、レディがそんな大きな声を出したらはしたないですよ？」
そうたしなめる夫人の顔は穏やかで、母としての優しさに満ち溢れていた。

「いっけない、これからは気をつけます。お母様」
アンナの心は、期待で満ち溢れていた。
そんなアンナの期待を乗せて、馬車は屋敷を目指して進んでいく。

まさかこのあと、天使の笑顔を持つ悪魔と対面する事になろうとは、この時はまだ知る由も無かった……

しばらく馬車に揺られ、田園風景を抜けると、男爵邸に到着した。
馬車が門扉をくぐりぬけると、目の前にある噴水からは水がキラキラと溢れ出していて、その周りでは美しい花々が競い合うように咲き乱れていた。
こんな世界が本当にあるなんて、信じられない！
妖精でも出てきそうな雰囲気ね。
アンナは、これからここで自分が生活をしていくなんて夢のようだと思った。
美しい石畳を進んで行くと、やっと玄関の扉が見えてきた。
門から玄関までだけで、孤児院より広いわね……
そんな事を思いながら玄関ポーチに目をやると、扉の前には使用人らしき人達が、一列に並んで到着を待っている。
馬車が止まると、黒服の初老の男性が近づき、馬車のドアを開けてくれた。
なんか本当にお嬢様になった気分だわ。
実際、今日からはこのパーシヴァル家の令嬢として過ごしていくのだが、アンナにはまったく自覚が無い。
ただただ、素晴らしく広くて美しい邸宅に、タメ息が出る思いだった。

「こんにちは。今日からお世話になります、アンナです。よろしくお願いします」
馬車を降りて、ペコっと頭を下げて言ったアンナに、傍に控えてい

た使用人達は、驚いている。
その様子を見た男爵夫妻は、一瞬固まった。
ん？私、何か変な事を言ったかな？
「ア、アンナ、執事のギルバートに、あなたの部屋を案内させるから、着替えてきたら？」
慌てたように夫人がそう言うと、ギルバートと呼ばれた初老の男性は、無表情のまま頷き、アンナの方に向き直った。
「アンナお嬢様、ご案内致しますので、こちらへ」
そう言って歩き出したギルバートの後をついてアンナも歩き出すと、後ろでメイド姿の女性達がコソコソと何か話しているのが聞こえた。
「……って……よね……」
彼女達からは距離があり、会話の内容までは聞こえなかったが、あまり良い印象は受けなかった。
何よ、感じ悪いなぁ、言いたい事があるならはっきり言えばいいのに。
ただ今日からお世話になります。って挨拶しただけじゃない……何か変だったのかな？
そうだ、ギルバートさん、だっけ。この人に聞いたら何か教えてくれるかもしれない。
アンナは、階段を昇るギルバートの背中に声をかけた。
「ねえ、ギルバートさん」
「はい、なんでございますか？」
「さっきの事、なんだけど……？　私、何か変な事言ったのかな？」
ギルバートは、アンナの言葉に一瞬足を止めるが、また歩き出す。
「こちらが、アンナお嬢様のお部屋になります」
事務的にそう言い、荷物を置くと自分の役目はここまでだ、と言わんばかりに部屋を出て行こうとするギルバートを、アンナが呼び止める。
「ちょっと！　ギルバートさん。さっきの答え、まだ聞いてないんだけど？」

アンナに呼び止められ、振り向いた彼の表情からは、感情を読み取る事は出来ない。
「それでは言わせて頂きます。一般的に貴族の方が、身分の低い使用人と直接お話をされる事は、まず有り得ません。
アンナお嬢様は、直接お声を掛けられた上に、お辞儀までなさった。ですから、使用人達が驚いても仕方の無い事かと」
「でも、あなたは男爵夫人にも、直接声をかけられていたじゃない？」
アンナの言葉に、今まで感情を表に出す事のなかった彼の表情が、初めてピクリと動いた。
ように思ったのもつかの間で、またすぐに元の彼の表情へと戻って言った。
「お言葉ですが、お嬢様。私は執事ですので、他の使用人とは違うのです」
どうやら彼のプライドを傷つけたようだったが、アンナには執事と使用人がどれほど違うのか、なんて理解できなかった。
でも、自分のした事は男爵令嬢としては大失敗だったんだ。という事は理解して、素直に謝ることにした。
「そう、なの……貴族社会も大変なのね。その、ごめんなさい。私ってば、無神経な行動を取ってしまったみたいで……」
「いいえ。アンナお嬢様が特殊な環境でお育ちになった事は、男爵様から伺っておりますので、お気になさらないで下さい」
特殊な環境って……なんか、見下されてる気がするのは気のせい？
そういえば、さっきのメイドさん達も、そんな感じだったのかも……
そこまで思うと、この先の事が一気に不安に思えてくる。
「では、私は失礼致します」
ギルバートは、今度こそ自分の役目は終わったという感じで、部屋から出て行った。
はぁ……なんか、疲れちゃったかも。

貴族って色々大変なんだな……
アンナは、一人部屋に取り残されて、少し落ち込んだ気分を変えようと、窓の方へと歩いていく。
そこからは、内庭が見渡せるようになっていた。
先ほど馬車から見えた、美しい風景が目の前に広がっている。
バルコニーに出て、清清しい風に吹かれていると、さっきまでの気分も一緒にさらっていってくれるようだった。
素敵！　こんなに綺麗なお庭は、見た事ない！
貴族の方のお屋敷って、みんなこんなに綺麗なのかな？
孤児院にも庭はあったが、これほどまでに色とりどりの花々が咲き乱れているような美しい庭ではなかった。
そうして、外の景色を楽しんでいると、部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。
「はーい。開いてるよ？」
そう答えると、メイド姿の女の子がおずおずと入ってきた。
「失礼します。わ、私、アンナお嬢様の専属メイドになりました、り、リリスと申します。よろしくお願いします」
専属のメイドさんなんて、いるんだ。びっくり！
あまりにも今までとは違う環境に、多少戸惑いを感じたが、黒縁眼鏡をかけ、漆黒の髪をおさげにしたその少女をみる。
この子、孤児院にいた少女にちょっと似てるかもしれない。
大人しそうで、おっとりした感じなんて、そっくり。
そう思えば、すぐに親近感が湧き、バルコニーから部屋の中に戻って、リリスと名乗った少女へと歩み寄る。
「私はアンナ。よろしくね」
そう言って、リリスの手をしっかりと握ると、手が触れた瞬間、リリスは一瞬身をすくめるような仕草を見せた。
なにやら彼女は、とても緊張した様子だ。
あ……いけない。気軽にこういう事をしちゃダメなんだったっけ？
さっき執事のギルバートさんに、言われたばっかりなのに、つい

今までの感覚で……
「あ、ごめんね？　私、貴族の習慣ってまだ良くわかってなくて……驚かせちゃったよね？」
「い、いえ……大丈夫です。わ、私、田舎から出てきたばっかりで、まだまだ不慣れなもので、お嬢様にご迷惑を掛けてしまうんじゃないかと思ったら、ふ、不安で……」
どうやら、アンナの突拍子の無い行動に驚いたというよりも、彼女もこの屋敷に慣れていなくて、緊張しているみたいだった。
「リリス、そんなに緊張しなくて平気だって。そうだ！　私達きっといい友達になれると思うんだけど、どうかな？」
私の言葉に、彼女の表情が柔らかく変化して、ほ～っと詰めていたものを吐き出すかのように息をつくと、やっと笑顔になってくれた。
色々と話を聞けば、田舎とはいえリリスのお父様は、綿織物の工場を経営しているらしく、彼女もそれなりのお嬢様で、カンター男爵家には花嫁修業の為に、メイドとして雇ってもらったのだという。
　それからリリスと私は、大きなクローゼットの扉の前で、数え切れないくらいのドレスに翻弄される事になった。
「ちょっと、このドレスの数って、普通なの？」
目の前にある、白やピンクや青のドレスの数々は、まるでさっき見ていた花が、クローゼットにまで咲いているかのようだった。
私はもちろんの事、リリスも呆然としている。
「どうなんでしょうか……？　でも、パトリシアお嬢様が、同じドレスを着ているのを見た事がないので、きっとそういうものなんですよ」
「パトリシア？　妹はパトリシアって言うんだ！　あー早く会いたいっ！」
思わぬところから妹の名前を知って、喜びのあまりつい大きな声で言ってしまう。
思わず、辺りを見渡して、部屋の中にはリリスしかいない事を思い出してほっとした。

「今のは、お母様とお父様には内緒にしてね」
いたずらっぽくリリスにお願いすると、彼女は快く承諾してくれた。
私の専属メイドさんが、リリスみたいな良い子でよかった。
アンナは心底、そう思っていた。
これが熟練したメイドさんだったりしたら、きっと「アンナお嬢様！　男爵令嬢ともあろうお方がなんですか……」とか言って長いお説教が始まったに違いなかったからだ。
もしかして、これもお父様とお母様の、私に気を使わせない為の配慮なのかもしれない。
こんな素敵な部屋を用意してくれた事といい、あの素敵なドレスの数々といい、本当に私は良い両親に恵まれていたのね。
そう思えば、家族とまた巡り合えた事を、神様に感謝したい気持ちでいっぱいだった。
「あの、アンナお嬢様。今夜の夕食は何色のドレスになさいますか？」
感慨にふけっていると、リリスから声をかけられた。
彼女はドレスに埋もれそうになりながらも、一生懸命私のために選んでくれようとしていたのだった。
「ごめん、ボーっとしちゃって。そうねぇ、出来るだけ、レースやフリルの少ないものがいいんだけど……」
「少ないもの、ですか？」
私の言葉に、リリスは意外そうな表情を浮かべている。
「うん。だって、急にレースやフリルのいっぱい付いたドレスなんて着たら、裾を踏むか、どこかにひっかけるかしちゃいそうで……」
理由を告げれば、リリスはクローゼットの中でも、一番シンプルな絹地のピンクのドレスを持ってきてくれた。
「綺麗な髪の色で、どんな髪型でも映えますね。素敵です～」
なんとかきついコルセットも絞め終わり、着替えてリリスに髪を結い上げてもらうと、そこには見知らぬ自分の姿があった。
「ドレスと髪型で、ここまで変わるものなのね。こんなに華やかな

格好をするのは初めてで、似合ってるのかも分からないや。変じゃ、ないかな……？」
思わず、鏡に近づいてまじまじと自分の姿を確認するが、見慣れないせいなのか違和感があるようで不安になった。
「すごくお似合いです。きっと男爵様ご夫妻も、アンナお嬢様を誇りに思われますよ」
そんなリリスの言葉に、気恥ずかしさを覚えるが、少し安心できたような気がした。
「それでは、私はこれで。またご夕食の時にお声をかけさせて頂きます」
そう言って、リリスは一礼すると、部屋から出て行った。
　ついに妹、パトリシアに会えるのね。きっと可愛いんだろうな～
　たくさんおしゃべりして、リリスみたいにお友達みたいな姉妹になりたいな。
　私がわからない事もきっと色々知ってるだろうし、いっぱい教わらなくちゃね。
アンナはリリスが夕食に呼びにくるまでの間中、ついに会える妹に、思いを馳せていたのだった。

晩餐会

リリスに案内され到着したのは、一階にある重厚な扉のダイニングルームだった。
「失礼致します。アンナお嬢様がお見えになりました」
リリスがそう声をかけて扉を開くと、その部屋の豪華さに思わず息を呑んだ。
天井部分には天使の絵が描かれ、豪華なシャンデリアが下げられていて、品の良い調度品が壁際のチェストの上に飾られている。
「やあ、アンナ。見違えたね」
奥に座っていたお父様が、腰を上げてそう言った。
「こんなに素敵なドレスを、ありがとうございます」
私はかなり緊張していた。
目の前には、噂の妹、パトリシアが座っていたのだ。
お父様は私の言葉に、穏やかな微笑を浮かべて、席までエスコートしてくれる。
「アンナ、紹介するよ。私のもう一人の娘、パトリシアだ」
そう紹介された少女は、優雅にその場に立ち、ドレスの裾をそっと掴んで挨拶をしてくれた。
　なんて優雅な立ち振る舞い……
アンナは思った以上に、可憐で美しい妹に軽い感動を覚えていた。
「あなたがパトリシアね！　お母様からあなたの事を聞いてから、早く会いたくて、ウズウズしてたの！」
私の言葉に、パトリシアは心底嬉しそうな顔をしている。
「私もお会いしたかったわ、アンナお姉様。私の事はパティって呼んでくださいね？」
小柄で華奢な彼女は、そう言って、ふんわりと抱きついてきた。
　なんて綺麗な子だろう……
　まるでお人形さんみたい。

美しい栗色の髪に青碧の瞳を持つ妹は、本当に愛くるしい笑顔で、こちらをじっと見つめている。
「ありがとう、パティ。あなたみたいに可愛い妹がいてくれた事、本当に嬉しいわ。これから仲良くしようね」
私が、また大きな声をだしてパティを驚かせないように、出来る限り穏やかに言うと、その様子を夫妻も満足げに眺めている。
和やかな雰囲気のまま、楽しい夕食が始まる。
「そうだアンナ、1週間後に君のお披露目をしようと思うのだが」
嬉しそうに目尻を下げながら、お父様がそう言った。
「お披露目？　何をするの？」
「お客様をお招きして、晩餐会を開こうと思っているんだ」
晩餐会……食事会みたいなものかな？
いまいちイメージが掴めないでいるアンナはそんな風に気軽に考えていた。
「まぁ、素敵！　ドレスを新調しなくてはね、アンナお姉様」
パティが青碧の瞳を輝かせて、うっとりした口調でそう言った。
「そうなの？　部屋にもたくさんのドレスがあったし、私はあの中の一着で十分よ？」
「まぁ、アンナお姉様って、楽しい事を仰るのね」
パティにふふふっと笑われて、またおかしな事を言ってしまったんだ、と気が付いて赤面する。
「パティ、アンナはまだ、この生活に不慣れなのだから、あなたがそんな事を言ってはダメでしょう？」
そうお母様にたしなめられて、パティは俯いてしまった。
「お母様、私が変な事を言ってしまったんだから、パティを責めないであげて？」
可愛い妹が、自分のせいで怒られたみたいで、嫌だった。
これから、一週間、パティに色々教えてもらわなきゃね。
その時、パティが口惜しいそうに表情を一瞬歪めた事に、誰も気が付かなかった。

楽しい夕食の時間も終わりに近づき、後はデザートを待つばかりだった。
「パティ、アンナ。あとは二人でゆっくりと、シェフご自慢のデザートを召し上がってちょうだい」
運命的にまた巡り合った姉妹に、二人で積もる話もあるだろうからと、気を利かせたお父様とお母様は私とパティを残して、自室へと戻って行った。
「ねえパティ、デザートは何だろうね？　楽しみだね」
「……」
「パティ？　どうしたの？　どこか具合でも悪くなった？」
急に黙ってしまったパティが心配で、何度も声をかけるが、やっぱり反応は無い。
「ねえ…」
「気軽に、話しかけないで下さらない？」
私の言葉を遮った彼女の言葉に耳を疑う。
え……？
今の、パティが言ったの？
もちろん、今この部屋にいるのはパティと二人だけなのだから、彼女以外はあり得ないんだけど……
すぐには信じ難かった。
「田舎訛りがきつくって、何をお話になっているか理解できませんから」
パティは、先ほどまでのお人形のような彼女からは、想像できない事を次々と口にした。
なにこの子っ！？　もしかしてこれが彼女の本性なわけ？！
「は？　なに？　どうしちゃったの？　お料理に何かおかしなものでも混ざってた……わけないよね」
「……」
パティは、私が何を言っても、もう会話をする気は無いらしく、視

線を合わせようともしなかった。
「再会を楽しみにしててくれたんじゃなかったわけ？　私達、血の繋がった姉妹なんだよ？　私は、妹がいるって聞かされた時は本当に嬉しかったんだからっ！」
「本当に血が繋がってたとしても、私は認めないわ」
そう言ってパティが椅子から立ち上がり、部屋から出て行こうとする。
「ちょっと、待って！」
彼女の細い腕を掴み、立ち止まらせると、彼女は露骨に嫌悪の表情を浮かべた。
「本当に失礼な方ね。手を離して頂けない？」
私の手を払いのけると、お付きのメイドを呼びつけて、部屋へと戻って行ったのだった。
一体、どうなってるの……？
もう、わけがわからないっ。
アンナはあまりにも混乱して、怒りを感じる余裕も失っていた。
ただ、今の出来事がショックで、信じられない気持ちでいっぱいだった。

晩餐会当日、私の心は新しく用意されたドレスを目の前にしても、晴れることは無かった。
あれ以来、妹のパティは口を利くどころか、視線すら合わせようとしてこない。
両親がいる前では、本当に可憐な、お人形のような少女なんだけどね。
「はあ……」
とても晩餐会なんて気分にはなれない……かと言って、お父様がせっかく私の為に、と開いてくれるのに欠席するわけにもいかないしな。

今夜の晩餐会は、アンナにとって憂鬱な物でしかなくなってしまっていた。
「アンナお嬢様？　お加減でも悪いのですか？」
専属メイドのリリスが、心配そうにアンナの顔を覗き込む。
アンナはその言葉に首を振るが、出来る事なら本当に具合が悪くなって、倒れてしまいたい気分だった。
「パトリシア様の事、ですか……？」
「え？　あぁ、リリスはずっと私の側にいたもんね。嫌でも分かっちゃうか……」
リリスの言葉に少し驚くが、この一週間、ずっと側にいて行動していたリリスに、嘘をついてもしょうがないと思った。
窓の外に目をやると、空が薄紫色に染まり始めていて、晩餐会が近い事を示していた。

私が会場に到着すると、広いホールには煌びやかなドレスや、燕尾服に身を包んだ客人達がいっぱいで圧倒される。
次から次へと招待客が会場に到着していて、まだまだ人数は増えていきそうな勢いだった。
入り口で呆然としていると、後ろから誰かに押されて、私はドレスの裾を思いっきり踏んでしまい、派手に前に転んでしまった。
「あら、いやだ。お姉様、大丈夫？　慣れないドレスに、もつれてしまったのかしら」
頭上の声に視線を上げると、そこには心配そうな表情を浮かべたパティの姿があった。
白々しい……あんたが押したんでしょ！
私は立ち上がり、文句の一つも言ってやらないと気がすまなかった。
「あのねぇ……」
「あらあら、二人ともどうしたの？　中でお父様がお待ちですよ」
口を開きかけたところで、お母様に声をかけられた。

「はい、お母様。お姉様も参りましょう？」
パティは一瞬、勝ち誇ったような顔をして、すぐに元のお人形さんのような可愛らしい表情に戻り、何事も無かったかのようにお母様の後を歩き出す。
あの切り替えの早さは、賞賛に値するわね。
そんな、パティの変化に気がついたのは私だけだろう。
二人の後を追い、会場に足を踏み入れると、皆一斉にパティに視線をやり、ため息を漏らした。
男性だけでなく、若い女性さえも、羨望のまなざしで彼女を見ている。
みんな、パティの美しさに夢中なのね。本性を知らないって、幸せな事よね。
私は心の中で、独り呟いた。
周りの華やかさに圧倒されながら歩いていて、気が付くとお母様とパティの姿はどこかに消えていた。
周りに気を取られていたら、はぐれちゃったみたい……
どうしたものかと、思案していると、後ろから声をかけられた。
「アンナ、一人でどうしたんだい？」
その声に振り向くと、そこには主催者であるお父様の姿があった。
「お父様！　良かった、お母様とパティとはぐれちゃって、一人でどうしたものかと考えていたの」
私の言葉に、お父様は穏やかな笑みを浮かべて、エスコートしてくれた。
そのままお父様に連れられて、色々なお客様にご挨拶をしていると、背後から強い視線を感じたような気がした。
そっと振り返ると、華やかなご婦人方が集まっている一角が目に映った。
着飾った貴婦人達の中で、更に目を惹いたのは、美しいブロンドの髪に、どこか憂いのあるブルーグレーの瞳を持った青年だった。
まさか、彼が私なんかを見ているわけはないし、気のせいよね。

その美しい青年が身にまとった絹の燕尾服は、シックな色合いが彼の相貌を更に際立たせていて、そして何よりも目を奪われたのは、彼の醸し出す雰囲気だった。
彼が発するオーラは、貴族の中にいてもひときわ異彩を放っていて、神々しく輝いて見えた。
それにしても、綺麗な人だな。天上から舞い降りた神のよう……
もしかして、私ってこの髪の色に弱い……？
ふと幼い頃に出逢った、天使のような少年の姿を思い出した。
彼も、同じ髪の色と瞳をしていた……
成長したら、彼のように美しい青年になっていそう。
でも、もしそうなってたら、恐れ多くて近づけないだろうけどね。
そんな事を思って、あまりにも熱心に見つめすぎたのか、その彼の視線が取り巻きの女性達から、こちらに向けられた。
いけない、あまりにも綺麗だからって、熱心に見つめすぎちゃった。
そんな風に戸惑っていると、目の前にいたお父様がその彼の姿を見つけ、歩み寄って声を掛けたのだった。
「やぁ、ジェリー。あ、いやこれは失敬。カークベリー伯爵、よくいらしてくれた」
ジェリー……？
その名前に、一瞬、懐かしいような響きを感じたが、すぐ目の前に迫った彼の姿に、そんな事はどこかに飛んでいってしまった。
カークベリー伯爵と呼ばれた彼は、落ち着いた雰囲気を漂わせていて、私よりも少し年上に見える。
まさに、伯爵という肩書きに、相応しい青年だった。
「これは伯父様、ご無沙汰しております。そちらが、噂のミス・アンナですか？」
初めて聞いた、彼の声は、艶のあるバリトンで、心地よく私の耳に響いてきた。
「ああ、紹介するよ。こちらは先月カークベリー伯爵位を継いだ、

ジェレミー・カークランド卿だ。アンナにとっては従兄弟にあたるんだよ」
そうお父様から紹介されても、私は彼の圧倒的な美貌に見惚れていて、お父様の声が聞こえていなかった。
「初めまして、レディ・アンナ。君の事はカンター男爵から伺っているよ。よろしく」
麗しい笑みを浮かべながら、手を差し出されて、私は舞い上がってしまったが、ここで失態を見せるわけにはいかず、なんとか気を取り直して、挨拶を返す事には成功した。
この一週間、リリスと一緒に特訓した甲斐があった。
初めての華やかな場所で、失敗しないように、こっそり猛特訓を重ねてきたのだった。
リリスに感謝しなくちゃね。
この場にはいない彼女に、すぐにでも抱きついてお礼を言いたい気分だった。

意外な一面

「それでは、カークベリー伯爵、私達はこの辺りで失礼しますよ。まだ今日の主役を皆さんに紹介しきれていないものですから」
お父様が、伯爵に会釈をしてその場から離れようとしたので、私も習ってそうすると、後ろからそっと腕を取られたので振り向くと、カークベリー伯爵が熱を帯びたような瞳で私を見つめていた。
突然、美しい彼の顔が間近に迫ってきて、私は心臓が早鐘を打つように高鳴るのを感じた。
「あ、あの……？」
「またお会いしましょう、ミス・アンナ」
小さく囁いた伯爵の目からは、すでに先ほどの熱は感じられなかった。
そんな彼の行動を不思議に思いながらも頷き、歩き出したお父様の後を追って、私も慌てて歩き出す。
でもやっぱり気になって、もう一度カークベリー伯爵に視線を向けると、彼は再び貴婦人方に囲まれてしまっていて、その表情を伺い知る事は出来なかった。
カークベリー伯爵、何か言いたげだった……？
きっと私の思い過ごしよね、じゃなかったら、きっとからかわれたんだわ。
生い立ちの変っている私が珍しかったんでしょ、きっと。
自分の出生が、常に暇を持て余している貴族の人達にとっては、いい話の種なんだという事は、嫌ってほどわかってる。
彼も、そんな中の一人なんだと自分に言い聞かせてみるけど、あの熱を帯びたような瞳が私の頭の中から離れなかった。
その後も、色々なお客様に忙しく挨拶をしてまわり、私がその役目から解放されたのは晩餐会も終わりに近づいてきてからだった。

あまりにも慣れない事の連続で、さすがに少し疲れてしまい、一人そっとバルコニーに出て休憩を取る事にした。
濃紺の空には無数の星が瞬いていて、薄くなった月が淡く庭先を照らし、昼間の華やかさとは違う、幻想的な雰囲気を醸し出していた。
ふう、パーティって疲れる……
貴族のお嬢様って、意外と大変。
生まれながらのお嬢様なら、そんな事は感じないんだろうけど。
年頃を迎えた娘にとって、パーティというのはいかに目立って、自分を売り込む事が出来るかという戦場のようなもの。
そんな風に、リリスが言っていたのを思い出した。
そんなものなのかな？
私には理解できそうにもないけどね。
私って貴族社会には向かないもの。
もちろん、育った環境が特殊だからという事もあるけど、それ以上に性格的に合わないと感じていた。
私なら、色々な男性に自分を見てもらうよりも、たった一人自分が好きになった人だけに見て欲しいと思うからだった。
そんなアンナの脳裏に、あの天使のような少年の姿が蘇る。
もう、会うことなんてないのに、バカみたい、私……
少し、自嘲気味に考えていると、後ろから声をかけられた。
「失礼、レディ。主役がこんな所で、さぼってていいのかな？」
む……誰よ、失礼な。少し休んでるだけよ！
「さぼってなんかっ！……」
さぼってる、なんて汚名を着せられて、黙っていられるほどお嬢様じゃないわよ、私！
勢い良く振り向くと、そこには、いたずらっぽく微笑んだカークベリー伯爵の姿があった。
「あ……カークベリー伯爵……」
そこにいたのが予想外の人物だった事に驚いて、またやってしまったと思ったときには遅かった。

レディたるもの、大きな声を出すのは、はしたない事。というのは、頭ではわかってるんだけど、なかなか難しい……
生まれてから16年間、思ったことはすぐに口に出してきた私にとって、考えるよりも先に、口が開いてしまうのは習性のようなもので、すぐにどうにか出来る物じゃないんだもん。
そう思って俯いていると、伯爵が微かに震えているのが分かった。
やば……怒らせちゃった……？
怒りで震える姿を想像して、美人が怒ったら怖そうだな……なんて思わず場違いな事を考えながら、恐る恐る顔を上げてみると、なんと彼は手を口元に当てて、身体を震わせながら笑いを堪えていたのだった。
「し、失礼しましたっ。けど、そんなに笑わなくてもいいじゃない……」
笑われた事が頭にくるやら、恥ずかしいやらで、思わず口先を尖らせてしまう。
「いや、失礼……お、思った……とおりの……反応だったもんだから」
それでもまだ、美しい顔を歪めて笑いを堪えている伯爵に、思わず背を向ける。
なによ！　いくらなんでも笑いすぎだわ。
さっきとは随分違うじゃない、こんなに大げさに笑うような人には見えなかったわよ。
さっきお父様に紹介されたときの彼は、気品があって、どちらかと言うと近寄りがたい雰囲気を醸し出していた。
「そんなに私をからかって、楽しいですか？」
後ろでまだ笑っているだろう伯爵に向かって、そう抗議する。
もう伯爵だろうとなんだろうと、構うものかという気分でそう言ったけど、あまりに反応が無いのが気になり、思わず後ろを伺うように振り返った。
さっきみたいに、堪えるような表情は無くて、突然真摯な顔をして

いる彼の姿に心が動かされた。
「カークベリー伯爵……？」
さすがに気分を害してしまったのかと心配になって、彼に歩みよってみる。
「よかった、もうこっちを向いてくれないのかと思った」
そう言って安心したように笑顔を見せる彼は、初めて会った時の印象とは違い、少し幼く見えて親しみやすさを感じた。
カークベリー伯爵のそんな表情を見て、一瞬あの少年と、目の前の伯爵の姿が重なって見えたような気がして、妙な既視感に襲われた。
何、今の……？カークベリー伯爵が、あの子に見えた……？
まさかね！あまりのギャップに、動揺してるんだわ、私。
彼にもう一度背を向けて、気持ちを落ち着かせる事に集中する。
そうでもしないと、うるさい位に高鳴っている胸の鼓動が、彼の耳にも届いてしまいそうだと思った。
お父様は、伯爵を「ジェリー」と呼びかけていた……
同じ髪に同じ瞳。偶然……？
頭では否定しながらも、もしかしたらという思いに、私の心の中には大きな波紋が広がっていくのだった。

表と裏

晩餐会の翌朝……

アンナは、リリスが紅茶を入れてくれているのをボーっと眺めていた。

カークベリー伯爵が、あの子なのかな……

「アンナお嬢様？　どこかお加減でも悪いのですか？」

漠然とそんな事を思っていて、リリスに声を掛けられ、初めて自分が考え事をしていたのに気が付いた。

「え？　あー、ごめん、なんでもないの。慣れない晩餐会に出席してちょっと疲れちゃっただけよ」

リリスに心配を掛けた事が、申し訳なくて、慌てて紅茶のカップを手に取る。

そんなアンナの様子に、リリスがもう一度口を開きかけた、その時……

バンッ！と大きな音と共に、部屋のドアが開かれた。

驚いてドアに目をやると、なんとそこには妹のパティの姿があったのだ。

パティ？！

アンナは突然の出来事に、手に持っていたカップを床に落としかけた。

パティは、そんなアンナを、気にもしない様子で目の前まで歩み寄ると、有無を言わさずにアンナの頬を打ちつけたのだ。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

「いったーいっ！　いきなりなにすんのよっ！」

言うと同時に、アンナも同じように打ち返し、部屋に乾いた音が響き渡る。

「あなたなんかに、ジェリーお兄様は渡さないんだからっ！」

そう言ったパティが、更にアンナに掴みかかろうとして、あわや取

っ組み合いの喧嘩になりかけたその時、呆然としていたリリスが我に返り、なんとか二人を引き離す。
「お嬢様方、お止め下さいっ！！」
リリスの言葉に、パティは悔しそうに唇を歪ませて、部屋を出て行った。
「ちょ……なんなのっ！？」
あまりにも唐突な出来事に、アンナはパティが去った方向を、呆然と見つめる事しかできなかった。
アンナの混乱した頭に、パティの言葉が蘇る。『あなたなんかに、ジェリーお兄様は渡さないんだからっ』
「アンナお嬢様、大丈夫ですか？」
リリスに声を掛けられて、なんとか冷静を取り戻すが、どう考えても納得の行く理由は見当たらなかった。
「一体、なんだったの、今のは……」
パティに打たれたところがピリピリと痛んでいた。
アンナの頬は、少し赤くなってはいたものの、幸い跡が残るようなものではなく、朝食の時間にはすっかり元に戻っていた。

アンナがダイニングルームに行くと、お父様の足元に縋りついて泣いているパティの姿が目に入る。
パティの真っ白な頬には、先ほどアンナが打ちつけた跡が痛々しいほどに残っていた。
やられた……
そういう事だったのね。
アンナは、その状況を一目見ると、自分が置かれた立場を理解した。
天使の顔を持つ、悪魔な妹の罠に、まんまと掛かってしまったのだと気が付いたのだ。
透けるように白いパティの肌は、一度赤くなってしまったら、なかなか元には戻らないのだろう。
何も痕跡の残っていないアンナが、いくらパティが先に手を出して

きた、と訴えたところで、真実味は無い。
正に、それこそがパティの企みだったのだ。
それで、いきなりあんな事してきたのね。
これで、納得がいったわ。
私が、もっと冷静でいられたら、何も問題はなかったんじゃない……
アンナは、自分の浅はかさを後悔した。
「アンナ、こちらに来て掛けなさい」
いつもは穏やかなお父様は、見たことも無いような厳しい表情を浮かべている。
言われるがまま、椅子に腰掛けて、次の一言を待つ。
「どういうことかね？」
「待ってください、お父様！　パティがいけないんです。何かアンナお姉さまの気に障ることをしてしまったのですわ、きっと……」
パティは、か細い声でお父様にそう訴えた。
あんたはちょっと黙っててっ！
アンナはそう言ってしまいそうになるのを必死で堪える。
「お言葉ですが……」
思い余って、意見しようとしたリリスを、厳しい視線で咎める。
「アンナ、君も慣れない生活で、疲れているのは分かる。でも、もう子供じゃないんだ。レディとしてのマナーも身に付けていかなくてはいけないよ？」
「そうよ、アンナ？　急には無理なのは分かるのよ。でもね、夏になればシーズンがやってくるわ。せめて、それまでに基本的なマナー等を学んで貰う為に、あなたには家庭教師を付ける事にしますからね？」
怒鳴られる事を覚悟していたアンナにとって、それはとても意外な言葉だった。
まるで、小さな子供を諭すように、そう両親に語りかけられて、素直に頷く事しか出来ないアンナであった。

家庭教師

「あなたには家庭教師を付ける事にしますからね？」

お母様にそう告げられてから、数日が経った。

アンナは、家庭教師の事よりも、パティがあの日に口走った言葉が気になっていた。

『あなたなんかに、ジェリーお兄様は渡さないんだからっ』そんなパティの言葉が、何度も何度も蘇ってくる。

パティ、カークベリー伯爵を「ジェリーお兄様」って呼んでた。

それ位、親しい間柄って事よね。

もちろん従兄弟同士なんだから、別に不思議な事でも無いけどさ……

物思いにふけっていると、リリスが呼びに来た。

「アンナお嬢様、男爵様がお呼びです。応接室まで来るようにとの事です」

リリスの言葉に、ついに来るべき日が来てしまったことを悟った私は、一気に憂鬱な気分になった。

「分かった、すぐ行くわ」

リリスにはそう答えたけど、足取りは重い。

家庭教師が来たのよね、きっと……

どんな人なんだろう、すっごく厳しい人だったりしたらどうしよう。

って、なんだか私、ここに来てから考え事ばっかりしてる気がする……

応接室に向かいながら、男爵家に来てからの日々を思い出す。

まだ1月も経っていないのに、孤児院で過ごしていた日々が遠い昔の事のように感じた。

重々しい扉の前に立ち、ノックをすると、中から「入りなさい」

と声をかけられて、思い切って扉を開ける。
「お呼びですか、お父様」
中に入ると、お父様の横に並んで立っている青年に自然と視線が動いた。
お、男の人?!私はてっきり、おばさんかおじさんの先生だと思ってたのに。
「アンナ、紹介しよう。彼が今日から家庭教師をしてもらう事になった、ルーク・カークランド君だ」
「初めまして、レディ・アンナ。ルークって呼んで下さいね」
ルークと名乗った青年は、人懐っこい笑顔を浮かべて、とても爽やかに握手を求めてきた。
アンナが、呆気に取られながらも握手に答えようと手を差し出すと、ルークはその手を取って恭しく顔を近づけると、彼のブロンドの髪がさらりと手にかかる。
「えっ、ちょっと!?」
握手のつもりで差し出した手に、突然顔を寄せられたアンナは、驚いて手を振り払ってしまった。
「これは、失礼しました。でも、少しずつでいいので、正式な挨拶も慣れていきましょうね」
目を丸くしているアンナにルークはとても穏やかに、そして紳士的な笑顔を向けてくれていた。
やだ、私ってば。てっきりキスされるのかと思った。
ちょっと、考えれば分かりそうな事なのに……
恥ずかしいーっ!!顔から火が出るとは、この事ね。
「ルーク君。こんな娘だが、ぜひ、よろしく頼むよ」
頬を羞恥の色に染めて、小さくなっている私を見て、お父様はちょっと困ったように微笑んでいる。
「いえ、僕でお役に立てるかどうか、分かりませんが、出来る限りの事はさせてもらいますよ。叔父様」
ルークが茶目っ気を含んだウィンクをしながらそう言ったのだ。

叔父さん……？　って事は……？
「ははは、兄上のカークベリー伯爵にも、よろしく伝えておいてくれ。また、遊びに来てくれと言っていた、ともな」
「はい。兄も叔父様によろしく、と言っていました」
和やかに進む二人の会話に、私一人が蚊帳の外にいるようで、ちょっともどかしかったが、会話に入っていく事も出来ずにいると、そんな様子を察してか否かルークが声をかけてくる。
「さて、レディ？　早速授業に取り掛かりましょうか」
カークベリー伯爵とはあまり似ていない、さっきの懐っこい笑顔を浮かべたルークに、お父様もぜひそうしなさいと気を利かせて、部屋から出て行った。
急に二人きりになって、戸惑う私を尻目に、ルークは今まで掛けてなかった眼鏡を掛けて、なにやら準備を始めた。
　眼鏡を掛けると、雰囲気がずいぶん変わるのね。
そんな事を考えながら、ルークを見ていて気が付いたことがあった。
彼も、カークベリー伯爵と同じ瞳の色をしていた。
　兄弟って、髪や瞳の色も似るのね。
　それ以外は、まったく似てないけど……
ルークにはカークベリー伯爵のように、人を圧倒するような雰囲気は無く、どちらかといえば、安心感を与える印象だった。
痩身に細身の三つ揃えのスーツが良く似合っていて、知的で落ち着いた雰囲気を漂わせている。
「まずは、基礎からやりましょうか」
そう言ってルークが私に手渡してきたのは、ブックバンドで一つの束にされた数冊の本だった。
一冊が分厚くて、手に持つとずっしりと重たい。
「あの……？」
渡された本の意図が分からずに戸惑っていると、ルークがお手本を見せてくれるという。
「こうやって、頭の上に乗せて落とさないように歩く練習をしまし

ょう」
話しながら、器用に頭上に本を乗せ、事も無げに歩いて見せて、「ね？簡単でしょ？」と、また私の方に本を渡してくる。
あ、歩く練習から？！
諦めた私は、試しにさっきルークがやって見せた様に手に持った本を頭上に乗せてみるが、バランスを崩して本を落下させてしまうのを、繰り返す事数回……
まったく成功する気配は無かった。
う……見てると簡単そうだったのにー！
「アンナ、焦ると余計に上手くいかないので、ゆっくりやりましょう」
なんだか道のりは果てしなく長そうね……
本物のレディへの道は、そう簡単じゃないって事か。
一つ救いなのは、家庭教師をしてくれる青年、ルークが人並み以上に忍耐力があり、決して怒ったり怒鳴ったりするようなタイプには見えない事だった。

淑女への道

ルークからの提案で、まずは歩くのではなく、立つ事を意識して練習をすることにした。
言われた通りに、頭上に本を乗せてそっと手を離すと、今まで一度も成功しなかったのが嘘のように、私の頭上に本は乗っていた。
「歩こうと意識しすぎて、バランスを取れなくなってたんだよ」
「本当だ、立つ事だけを意識すれば、意外と簡単に出来るものね」
本当に些細な事だけど、少しずつでも前に進める気がして、少し気が楽になった。
何回やってもダメなときは、どうしようかと思った。
ほっとした私の表情に気が付いたルークが、にっこりと微笑んだので、思わずつられて笑顔になる。
「それじゃあ、今度は少し廊下に出て、歩く練習をしてみましょうか」
そう言って、部屋を出ようとするルークの後について部屋を出ると、ちょうどパティがこちらに向かって歩いてくるところだった。
どうしてこの広いお屋敷の中で、こうタイミング悪く会っちゃうかなぁ……
また、嫌味の一つでも言われるんだろうと覚悟しながら、パティに目をやる。
「あら……」
そら来た。今度は何を言われるのやら……
次に繰り出されるだろう口撃に、少し顔が引きつりそうになりながら、思わず身構える。
「やぁ、パティお嬢様。相変わらず、ビスクドールのようにお美しいですね」
パティより先に、口を開いたのはルークだった。
ルークの口から、そんな言葉が出てくるのは、なんだか意外に思え

た。
　そんな事は普段から言われ慣れているパティは、きっと優雅にあの天使のような微笑で、お礼を言うんだろうな。
　それで、みんな騙されるんだよね……
そう思って、何気なくパティの顔を見て驚いた。
なんと、あのパティが、顔を真っ赤に染めて俯いている！
　ちょっと、もしかしてパティって、ルークの事……
今まで見た事もないパティの姿に、そんな事を考えてしまう。
「バカにしてるのかしら？！」
「おや、気に障ったかな？　褒めたつもりなんだけど？」
　あら？　何やら雲行きが怪しくなってきたような……？
　それに、パティが私以外の人に、裏の顔（？）を見せてるのって初めて見た。
私は二人のやり取りに、黙って耳を傾ける。
あくまでにこやかに言葉を続けるルークだったけど、眼鏡の奥の瞳は笑っていなくて、二人の間には険悪なムードが漂っていた。
どうやらパティは、褒め言葉が嬉しくて赤くなっていたわけじゃなくて、怒りで顔が紅潮していたらしい。
「私は、失礼しますわ」
パティは一瞬、青碧の瞳に怒りの色を浮かべて、この場から立ち去ろうとした。
「あ、そうだ。ちょうどいい。パティ、アンナに優雅な歩き方の見本を、見せてあげてくれないかな？」
「なっ……どうして、私がそんな事をっ……」
パティの様子を、まったく気にする様子も無く、当然のように言葉を続けるルーク。
　もしかして、実はルークってすごい人かも。
この屋敷に来てから、パティの魅力に惑わされずに、ここまではっきり物を言う人を見た事がなかった。
更に意外だったのが、不満そうな表情を浮かべながらも、パティが

ルークの提案を承諾した事だった。
いきなり私に、平手打ちをするような娘が、大人しく言う事を聞くなんて……
もしかして、パティってルークに何か弱みでも握られてるのかな？
そうでも思わなければ、目の前で起きている事が信じられなかった。
「アンナ、そういう事ですから、パティのお手本を参考にして下さいね？」
ルークが、急にこちらを振り返ってそう言ったので、私は慌てて頷く事しか出来なかったけど、さっきパティに向けられていたような、冷たい微笑みは無くて、ちょっとだけ安心した。

そこから、三人での奇妙なレッスンがスタートした。
さすがに生まれながらのお嬢様だけあって、パティのお手本は完璧だった。
頭の上に、本を乗せているとは思えないほど優雅で美しく、まるで滑るように歩くパティは、悔しいけど綺麗だと思った。
性格はかなり問題あるけど、本物のお嬢様なんだよね……
あれで、性格が良かったら、非の打ち所が無いのに、もったいないな。
「さすがですね、完璧です」
「もういいでしょ」
ルークが拍手をしながらそう言うと、パティは頭上の本をルークに手渡し、廊下に設けてあるテーブルセットの椅子に腰掛ける。
少し不機嫌そうに俯くパティは、彼女にしては珍しく無口だった。
「さあ、アンナ。今のパティの歩き方を参考にしてやってみて下さい」
ルークは、不機嫌そうに黙っているパティを、気にする様子も無くそう言った。
また、そんな簡単そうに言う……
「彼女が、私みたいに歩けるわけないじゃない」

「パティ、君には言ってないよ？」
もう我慢出来ないといった風に言ったパティに、ルークが優しくたしなめる様にそう言うと、パティは再び黙り込んでしまった。
ルークの一言で、こんなにも変わるなんて。
私は、二人の間にある確執が何かは分からなかったけど、ルークは完全にパティの上位に立っている、という事は確信した。
この、パティにも苦手な人がいたのね。
少しばつが悪そうに座っているパティを見て、ちょっと可愛そうに思いながらも、胸がすく思いだった。
ルークに家庭教師をしてもらっている間は、パティも少しは大人しくしてるかもね。
「さあアンナ、パティの事は気にせずに、続けましょうか」
悔しそうに唇をかみ締めているパティを尻目に、私のレッスンが再開された。
もしかしたら、ルークは私にとって、頼もしい味方になる人かも？！
ルークが家庭教師に来てくれた事は、私にとって大きな一歩かもしれないと思った。

お茶会

ルークが、パーシヴァル家に家庭教師として訪れるようになってから、1ヶ月が経とうとしていた。
歩き方から始まり、食事マナーや会話術に至るまで、徹底的に指導を受けたアンナは、屋敷に訪れた当初からは想像も出来ないほどの、身のこなしが出来るようになっていた。

今日は、アンナの今までの努力を労う為に、ルークがお茶会を催してくれる事になっている。
アンナは、カークランド家に向かう馬車の中で、久々に会う事になるカークベリー伯爵に想いを馳せていた。
なんだか、ドキドキするな。
あの晩餐会の夜以来、会ってないんだもんね。
私の事なんて忘れちゃったかな……？
「あの……私まで御一緒させて頂いて、本当に良かったのですか？」
そんな事を考えていると、隣に座っているリリスが、緊張した様子でアンナに尋ねてきた。
「もちろんよ！　リリスが、一緒にいてくれるだけで、どれだけ心強いか」
アンナは大袈裟ではなく、そう言った。
慣れない環境に戸惑うアンナに、リリスは本当に良くしてくれている。
アンナにとってリリスは、ただの専属メイドではなく、パーシヴァル家で唯一、気取らずに話せる大切な友人だった。
「ありがとうございます。そう言って頂けると、嬉しいです」
安心した様子のリリスに、笑顔を向けながらも、実はアンナの心は別の事でいっぱいになっていた。
あの、晩餐会の夜以来、レッスンの忙しさで誤魔化して、考えない

ようにしてきた事……
カークベリー伯爵は「あの少年」なのかどうか、何度もルークに尋ねてみようと思いながらも、聞きそびれてしまっていた。
いや、本当はアンナ自身も無意識に、答えを知る事に怯えていたのかもしれない。
もしも、あの少年がカークベリー伯爵だったら、自分はどうしたいのか、もし違ったらどうするつもりなのか。
アンナ自身も、答えを見つけられないでいるのだから……

カークランド家に到着すると、玄関ホールまでルークが迎えに出てきてくれていた。
「本日は、お招き頂きまして、ありがとうございます」
ルークの姿を見つけ、ドレスの裾をふわりと掴み、優雅に挨拶をするアンナとリリス。
その姿を見ているルークは、満足気に微笑んでいる。
「ようこそ、レディ。今日は楽しんで下さいね」
そう言ったルークにエスコートされながら、長い廊下を歩いていくと、その壁に何枚もの肖像画が飾られていた。
歴代のカークベリー当主と、その夫人のものであろう。
アンナは、その中の一枚に目を奪われた。
この人……私と同じ髪の色をしてる……
ふと幼い頃の記憶が蘇ってくる。
『僕の母さまが、同じ色をしていたんだ』
あの時の少年の言葉だ。
突然立ち止まり、一枚の絵に見入っているアンナに気が付いたルークが、アンナの元へと歩み寄る。
「前カークベリー伯爵夫人、僕ら兄弟の母ですよ」
ルークは目を細め、少し寂しそうに言った。
その言葉の意味を、アンナが理解するまで、少し時間がかかった。
ルークのお母様……？

私の叔母様に当たるのよね？
て、事はカークベリー伯爵のお母様でもあって……
そこで初めてアンナは気が付いた。
あの少年が、カークベリー伯爵なのか分からない今、可能性はルークにもあるという事に。
思えば、なぜ今までそんな単純な事に、思い至らなかったのか不思議な位だった。
ルークも、兄であるカークベリー伯爵と同じ髪と瞳なのだから……
私って、思い込むと、それしか考えられなくなるのは、悪い癖だな。
今まで気が付かなかったのは、私の願望だったのかもね。
アンナは自嘲気味にそう思った。
「アンナ？　どうかしましたか？」
絵を見つめたまま、動かないアンナにルークが声をかける。
「え？　あ、なんでもないの。すごく素敵な方で、少し見惚れていただけよ」
なんとかその場を取り繕うために言ったアンナの言葉を、ルークは疑った様子も無く「それじゃ、いきましょうか」と再び歩き出した。
その先にある突き当たりの扉から、内庭へと出ることが出来るようになっていた。
内庭にある、緑のアーチを潜り抜けると、少しひらけたその場所には、美しい花々が咲き誇り、辺りに芳醇な香りを漂わせている。
その中でも、一番目を奪われたのが、まるでピンクのレースを身にまとったように、儚げで可憐な花を咲かせている一本の大樹の存在だった。
今まで見た事も無い光景に、アンナとリリスはおとぎの国に、迷い込んでしまったかのような錯覚に陥っていた。
「ここは、屋敷の中で、僕が一番気に入っている場所なんですよ」
ルークが、目の前の白いテーブルセットの椅子を引き、二人を席まで案内する。

「あのお花、初めて見たけど、とっても素敵ね」
アンナは、風が吹くたび乱れ飛ぶ花弁が、春に舞い散る雪のようで美しいと思った。
「ああ。あれは父が生前に、亡くなった母を想って植えた『チェリーブロッサム』という種類で、この時期の一週間ほどしか花を咲かせず、とても儚い感じですが、僕は大好きな花ですよ。父は、母の髪の色と似た花を咲かせるあの木を、本当に大切にしていたものでした」
ルークは少し影を落とした瞳でそう語ってくれた。
「あ、ごめんなさい。辛い事を思い出させてしまって……」
「いや、僕の方こそ、気を使わせてしまいましたね。さて、そろそろメイド達が、サンドウィッチを運んでくる頃かな」
わざと、陽気にそう言ったルークの瞳に、もう陰りは無かった。

「悪い、遅くなった。レディを待たせるとは、俺とした事が、失態だったな」
アンナが、背後から聞こえたバリトンに振り向くと、そこには以前会った時と変わらない、圧倒されるような美貌の持ち主が立っていた。
「いや、僕達も今来たところですよ。兄さん」
心の準備も無いままに、突然現れた彼に、激しく動揺し、一瞬挨拶をする事さえも忘れてしまっていたアンナに、リリスが小声で「お嬢様、ご挨拶っ」と言ったところで、やっと我に返ったアンナ。
「本日は、お招きいただきまして、ありがとうございます」
アンナは、なんとか気を取り直し、先ほどルークにしたように優雅に挨拶をこなすが、内心は焦りでいっぱいだった。
「今日は、髪の毛を下ろしているんだな。そっちの方が似合ってる。まるで、あのチェリーブロッサムの妖精みたいだ」
ジェリーは挨拶をする代わりに、風に揺られてなびくアンナの髪の毛を見てそう言った。

晩餐会の夜に会った彼と、同一人物とは思えないほど、砕けた口調のジェリーに、驚きを隠せずにいるアンナ。
しかし、その思いをあからさまに表に出す事が無かったのは、今までルークから受けてきたレッスンの成果だった。
表面上は笑顔を保ちながらも、実はアンナの心は乱れていた。
ちょ……この変貌は何っ？！
なんだか、とっても恥ずかしい事を、サラッと言った気がするのは気のせい？！
彼、本当にあのカークベリー伯爵よね？
褒められる事に慣れていないアンナは、赤面している様子を心なしか楽しそうに見つめるジェリーに、一瞬疑いの眼差しを向けかけたものの、これほどまでに他人を圧倒するオーラと存在感を持つ人物が、この世に2人もいるとは思えなかった。
「兄さん、アンナが驚いているじゃないですか。いくら自宅とはいえ、前回会ったのは、晩餐会の時だったんでしょう？　あまり、ギャップが有りすぎるのもどうかと思いますが……」
見かねたルークが、兄に進言しているところを見ると、こちらが普段のジェリーの姿なのだと分かる。
「いいえ、カークベリー伯爵がこんなに気さくな方で、嬉しいですわ。従兄弟同士ですもの、堅苦しい事が無いお付き合いが出来るならば、そんなに嬉しい事は無いわ」
ちょっと、苦しかったかな……？
動揺した心を悟られないように、必死にレディの仮面を被り続けるアンナ。
「ルークは家庭教師に向いているようだな。随分しっかりとしたレディになったじゃないか」
あまり感情が篭っている様には、感じられない言い方だった。
「兄さん、アンナに失礼ですよ」
兄の非礼を詫びるように、申し訳なさそうな顔でアンナを見るルーク。

「いいのよ、ルーク。ありがとう」
そんなルークとアンナのやり取りを見ていたジェリーのダークブルーの瞳が、刹那揺らめいた事には誰も気が付かなかった。
「まあ俺の本性なんて、お前とアンナの婚約が決まればいつかは分かる事だし、いつまでも社交界用の仮面を着けてるわけにもいかないだろ？」
……！！
「はっ！？」
ジェリーの爆弾発言に、いつも温厚で冷静なルークが珍しく大きな声を出す。
「今、なんて言ったの？！　婚約？　誰と、誰が？！」
アンナも、流石に今回ばかりは、必死にレッスンしてきた甲斐も無く、思わず叫ぶように言ってしまったのだった。

婚約発表？！

「今、なんて言ったの？！　婚約？　誰と、誰が？！」

「アンナお嬢様、落ち着いて下さい」
レディの仮面も忘れて、取り乱したアンナを、リリスが何とかなだめる。
「信じられないなら、パーシヴァル家に戻ったら、確認してみるといい」
正面に座るアンナを、真っ直ぐ見据えて言い切るジェリーの言葉には、偽りの影は無い。
それでもアンナは、すぐには受け入れる事が出来ない様子だ。
「わかりました。これから帰って、お父様に直接確認します」
もはやアンナの中では、お茶会どころの騒ぎでは無いようで「今日はこれで失礼します」と一言告げると、リリスを連れてその場を後にしたのだった。
「まったく。相変わらず、慌しい娘だ」
アンナの後ろ姿を見送りながらそう言ったジェリーの表情は、言葉とは裏腹にとても穏やかに見えた。

「兄さん、どういうつもりなんですか？　急にあんな突拍子も無い事を言い出すなんて……きっと、アンナは本気にしましたよ？」
アンナが慌しく去った後に、最初に口を開いたのはルークだった。
「本気にしてもらわなければ、困る。何せカンター男爵からの、直々の申し出だからな」
ジェリーは、傍に控えていた若いメイドに、熱い紅茶を頼みながら、何気ない日常会話の様にそう言った。
「な……」
兄の言葉に唖然として、二の句を継げないでいるルークに、ジェリ

ーは更に続ける。
「俺達兄弟のどちらかが、アンナと結婚する事になっているのは、お前も承知してる事だろ。今更、何を驚く必要があるんだ？」
「ですが……本当にそれでいいのですか？　兄さんがアンナを……」
「まあ、アンナは知らなかったみたいだがな。ルーク、話しはここまでだ」
ルークの言葉を遮り、有無を言わせぬ口調でそう言ったジェリーに、これ以上何を言っても無駄だと思ったのか、ルークが深いため息をつく。
「分かりました。まずは、アンナの意思を確認してから、また話しをしましょう」
ルークは、それだけ言うと、温厚な彼にしては珍しく、憤りを隠せない様子で立ち上がり、去っていった。
　そこへ、先ほどの若いメイドが、淹れたての紅茶が入ったティーポットを手にやってきた。
カップに新しく紅茶が注がれると、芳しい香りが辺りに漂ってくる。
「ありがとう」
美しい主人に、普段ならあり得ないほどの極上の笑顔でお礼を言われた若いメイドは、耳まで真っ赤になりながら、慌ててお辞儀をして下がっていった。
メイドが下がり、一人で紅茶を楽しむジェリーの姿は、まるで一枚の絵のようにさまになっている。
「これで、いいんだ……」
そう自分に言い聞かせるように呟いた彼の胸中を知る者は誰もいなかった。

　パーシヴァル家に到着したアンナが、真っ先に向かったのは父、ヘンリーの所だ。
「お父様はどこ？」
　アンナが、迎えに出てきた執事のギルバートに尋ねると「書斎に

いらっしゃいます」と彼は、相変わらずの無表情でそう言った。
ギルバートに礼を言い、邪魔なドレスの裾をまくり上げて書斎へと急ぐアンナには、使用人達が驚愕の眼差しで見ている事に気が付く余裕も無かった。
アンナの後ろから、リリスが慌てて付いていくが、さすがにアンナのように屋敷の中で走るわけにもいかず、他の使用人達に同情の眼差しを向けられる事となった。
「あのお嬢様の専属は、気苦労が多そうだね……」
どこからか聞こえたそんな声に、今日ばかりは反論する事も無く、ただ俯いてアンナの後を追うリリスだった。
書斎に着いたアンナは、ドアの前でドレスの裾から手を離しノックする。
「どうぞ」
部屋の中に招かれ、座るように促されるが、アンナは落ち着いて座って話す気分ではなかった。
「お父様、カークベリー伯爵から、婚約の話し聞きました。一体どういう事なんですか？」
回りくどい言い方が嫌いなアンナが一気にそう言うと、ヘンリーは、あまりに真っ直ぐな質問に少々驚いた様子だったが、改めて目の前のソファに座るように促した。
「すべて話すよ。アンナ、まずは落ち着きなさい」
アンナとは対照的に、ゆったりと微笑む父の姿に、幾分落ち着きを取り戻したアンナは、父に言われた通りにソファに身を沈めた。
「そうだな。もっと早くに、私の口から伝えるべきだった。アンナ、今回の婚約の話は、お前が生まれた時から決まっていた事なんだよ」
アンナは、ヘンリーが言った事の意味が分からずに、唖然としている。
そんな娘の様子に、ヘンリーはゆっくりと言葉を続ける。
「前カークベリー伯爵が、お前が生まれた時に一目で気に入ってね」
ヘンリーは、当時の事を懐かしそうに目を細めて語りだした。

過去から現在へ

「はぁ……」

自室に戻ったアンナは、深いため息と共に、完璧にメイクされたベットに身を投げ出す。

貴族の娘が、生まれながらに許婚がいるのは、珍しいことじゃないって言うのはわかるけど……

どうして、将来、二人のうちどちらか一人、なんて事になるのよ。

アンナの脳裏に、先ほどの父の台詞が蘇る。

『本来ならば、長兄のジェリーの許婚に、という話しだったんだが……ルークが先に、生まれたばかりのお前にキスをした。それに最近、ルークとは親しくしているようだったからね。私の方から、カークベリー伯爵にお願いしたんだよ』

有り得ないっ！　たったそれだけの事で、ルークも婚約者になる資格が出来たから、私に選ばせる事にしたなんて！

しかも、選ぶどころの話しじゃなく、勝手に決められるなんて……

アンナが父から聞いた話しは、理解は出来ても、到底納得出来るものではなかった。

って、言っても……カークベリー伯爵は、私の事なんてなんとも思ってないんだから、結局意味無いけどね……ルークと婚約させようとしてる位だもの、むしろ迷惑だったんだわ。

聞かなきゃ良かった、あんな話し……二人のうちどちらか、じゃ無くて、最初からルークが婚約者と決まっていたなら、諦めもついたかもしれないのに。

見る見るうちに、アンナの瞳には涙が溢れてくる。

自分の感情に耐えられず、思わず枕に顔をうつ伏せて、声を押し殺し肩を震わせるアンナ。

こんな状況になって、自分がどれだけカークベリー伯爵に心惹かれていたか、気が付くなんて。

アンナは、ジェリーに対する、激しい恋慕の情が湧き上がって来るのを押さえ切れなかった。
ただ、次々と溢れ出す涙が、枕を濡らしていく……

「アンナお嬢様。失礼します」
どれ位そうしていたか、部屋の外からノックと共にリリスの声が聞こえて、アンナは慌てて身体を起こし涙を拭う。
「どうぞ」
ベットから起き上がり、乱れた髪形を整えながらアンナがそう言うと、リリスがスコーンやケーキが乗ったスタンドをワゴンに乗せて入ってきた。
「アンナお嬢様、お茶会の続きをしませんか？」
リリスは、目を真っ赤に充血させているアンナの様子には触れずに、笑顔を向けている。
それが彼女なりの気遣いだと知っているアンナは、素直に頷いてテーブルに向かい、椅子に座る。
「今日は、キャットニップのハーブティをご用意致しました。リラックス効果があるそうですよ」
カップに注がれた紅茶から漂う爽やかな香りが、アンナの高ぶった感情を、少しずつ解きほぐしていくようだった。
　リリスにも、心配かけちゃってるね。でも今は、この彼女の温かい気遣いが心地いい。
ゆっくりと紅茶を飲み、少しずつ気分が落ち着いてきた様子のアンナは、リリスに自分の初恋の話しを語り始めた。
「私ね……」
――幼い頃の、恋とも言えぬような淡い想い。それは、成長した今でも、心に残る大切な思い出で、初恋の少年が、ジェリーかルークのどちらか、かもしれないという事。その時のハンカチは、今でもお守りのように大切にしている事――
リリスに聞かせるというより、口に出して語る事で、自分の気持ち

の整理をつけているかのようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2049h/

氷の伯爵と桜色の風

2010年12月12日14時36分発行